

被虐待児の養育を担う専門里親のための 学習ツールの試行と評価

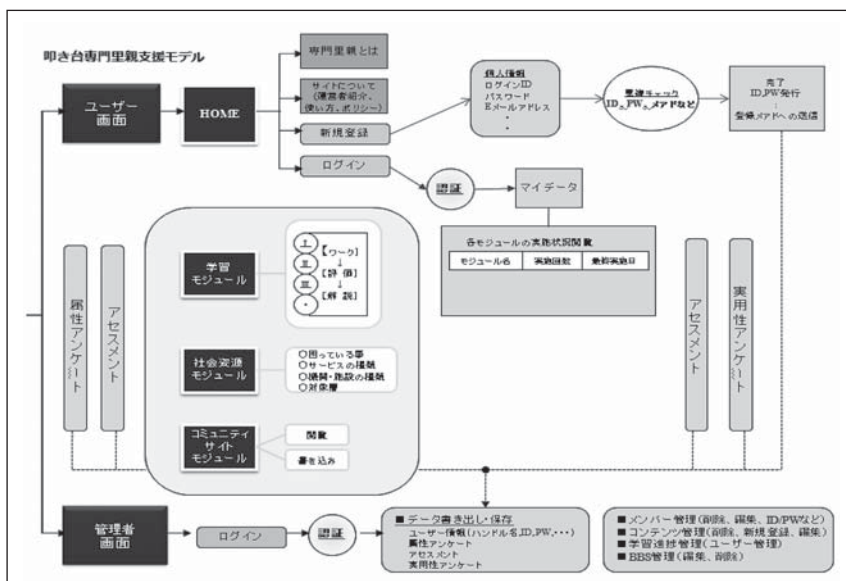
木 村 容 子

はじめに

2002年9月「里親の認定等に関する省令」および「里親が行う養育に関する最低基準」が公布され、里親制度の大幅な改正が行われた。従来の養育里親、短期里親に加え、親族里親と専門里親が創設された。専門里親は、児童虐待等の行為により心身に有害な影響を受けた児童を、2年以内の期間を定めて養育する里親である。養育里親経験者あるいは児童福祉事業従事経験者等¹⁾に対し、専門里親研修²⁾の課程修了を要件として認定される。里親制度は児童養護施設や乳児院といった児童福祉施設での養育にならぶ社会的養護³⁾の一形態であるが、欧米やオセアニア諸国では里親委託が主流である一方（湯沢、2004；菊池、2007）、わが国の社会的養護は施設養護が中心となってすすめられてきた。また、わが国の里親制度は、養子縁組を前提とした里親が主流であった（飯田、1998）ために、里親制度本来の養育里親とその里子に関する調査研究がほとんどなされていない実情がある。それゆえ、専門里親制度はとくにその運用面で下地になる実績がほとんどなく、どのような研修や支援をどのように提供するかが問われている⁴⁾。里親制度には、子どもの発達には乳幼児期における愛着形成が重要であり、できる限り家庭的な環境のなかで養育されることが必要との認識の下、要保護児童にとって家庭的環境のなかで養育する里親制度は有意義かつ拡充が求められている。専門里親の質を保障し、この目指すところを実現するためには、専門里親のための実践モデルを開発していく必要がある。

ウェルビーイングに大きく貢献するかどうかを調査、分析する。フェーズⅡでは、開発しようとする実践モデル⁵⁾の叩き台をつくる。フェーズⅢでは、叩き台を実際に試行し、評価する作業をくり返し行い（イテレーション）、その実践モデルを精錬させていく。最終段階フェーズⅣでは、開発した実践モデルを現場の多くの人々に知ってもらい、利用可能な新たな資源として採用してもらうように宣伝し、普及させていくこととなる。

本研究では、フェーズⅠにおいて、わが国や諸外国の里親制度の動向や、日本の里親制度下での運用、里親に対する支援の取り組みに関する文献研究から、専門里親に対する支援モデルを開発する必要性について分析した。また、これまでの里親制度にみる問題・課題や提言をなす論文、報告書などや、里親委託の実態、里親に対する支援・研修の実態や事例研究等の調査研究から、その問題とニーズを整理した。フェーズⅡでは、フェーズⅠを通じ得た知見と情報の分析から、2002年の里親改正時にはまだ存在しない専門里親にとっての里子養育に関する支援ニーズを検討することを目的に、里親に対する質問紙調査を実施した。専門里親の潜在性における分析から、専門里親支援モデルに必要な要素について考察を行った（木村、2005；木村・芝野、2006）。さらに、わが国あるいは欧米諸国での里親支援に関する実践理論や実践モデルや援助方法・技術について調べ、それらを踏まえ、実践モデルのデザインを考案し、叩き台をつくった（図表2）。その叩き台「専門里親支援モデル」は、大きくは「学習モジュール」「社会資源モジュール」「コミュニティサイト・モジュール」の3つのモジュール（モデルを構成する小さな独立したユニット）から構成される。フェーズⅢとして、本研究では、叩き台モデルのうち開発を優先して行った学習モジュール（以下、「学習ツール」と呼ぶ）に関する試行とその評価を行った。



図表2 叩き台専門里親支援モデル

本稿では、フェーズⅡにて開発された専門里親のための学習ツールの叩き台について概説し、フェーズⅢで実施した叩き台学習ツールの試行と評価について報告する。

Ⅲ. 学習ツールの概要

1. 学習ツール開発の意義

(1) M-D&Dにあるプロセティック・アプローチ

M-D&Dは、ライフ・モデルと岡村理論を視座とし、オペラント行動理論のパラダイムを用いて芝野（2002）が提唱したプロセティック・アプローチにもとづいている。GermainとGitterman（1996）のライフ・モデルでは、人の環境への適応力とストレスへの対処能力（コーピング；coping）と、その力を育むこともあれば損なうこともある環境との交互作用において人の成長と発達

を説明している。個人の適応能力とその人と環境の交互作用を把握し、人の適応能力と環境の育む力を高めるよう働きかけることがソーシャルワーク実践であると示した。また、人の社会生活における基本的要求とそれを充たす社会制度との関係（社会関係）の上から、そこに生じる問題を解決するのを援助することにソーシャルワーク実践の固有の働きがあるにとらえた岡村の理論（岡村、1957；1963；1983）も、「人と環境の交互作用」というライフ・モデルの概念と合致する。芝野（2002）は、そこにプロセティック（「補綴的」⁶⁾の概念を取り入れ、人の成長過程において育まれるべき問題解決（適応）能力（「コンピテンス」）を高める、プロセティック環境を創り出すアプローチを提案した。

これを、本研究に照らし合わせれば、専門里親に対する支援に焦点づける意味が明確となる。専門里親制度はそれ自体が新たな制度であるだけでなく、里親委託を積極的に推進してこなかったわが国の里親制度の運用とその研究からは、専門里親となる人が被虐待児等特別な配慮を要する子どもを養育するに十分なコンピテンスを培ってきたとはいいがたい。親の一時的代替として要保護児童を養育する里親は、委託された子どもの成長を育む環境（プロセティック環境）の大切な一部である。委託された子どもの成長ひいてはその子どもの福祉を実現していくために、里子に日々接し、また、里子の実親や児童相談所をはじめとする子どもをとりまく環境へも働きかけることが求められる。そのようなプロセティックな働きを専門里親が遂行するために、専門里親に対する支援モデルを通じ、専門里親としてのコンピテンスを高めていくことができると考えられるのである。

（2）ウェブサイトによる利用上のメリット

フェーズⅠの文献研究において、里親研修に関する実態調査では、実施回数も少なく、里親のニーズが多様で一律の研修では対応できない、里子の発達段階や里子里親のニーズに応じた研修が体系化されていないこと等が明らかになった。また、研修に参加しない・できない理由として、「研修に行く時間がない」や「研修場所が遠い」など、物理的な問題も浮びあがった（篠原、1998；庄司・谷口・安藤・ほか、1999；庄司・谷口・高橋・ほか、2000）。そ

こで、これらの問題の一解決策として、インターネットを介したウェブサイト型の学習ツールを開発することを考えた。

インターネットによる提供は、インターネットが使用できる環境さえあれば、時と場所を選ばず里親が必要な時いつでもどこでも自分のペースで効率的に利用することを可能にする。近年、eラーニング⁷⁾等のWBT (Web Based Training)⁸⁾が盛んになっているが、これらの強みは、時間や場所の制約から解放されるだけではなく、一貫性のある教育を無限の利用者（以下、ユーザーとする）に提供できることや、共有者によるコミュニティを形成し、学習意欲を向上させたり学習を補ったりできる点にある（坂手、2000; 荒木、2002; 森田、2002）。それゆえ、専門里親が各自自宅等で自己学習することも、あるいは、里親研修の主催者がこのツールのコンテンツを教材として用い、集団で学習するという使い方も可能であり、体系化された学習プログラムを均一に提供できるのである。

(3) ウェブサイトによる開発研究上のメリット

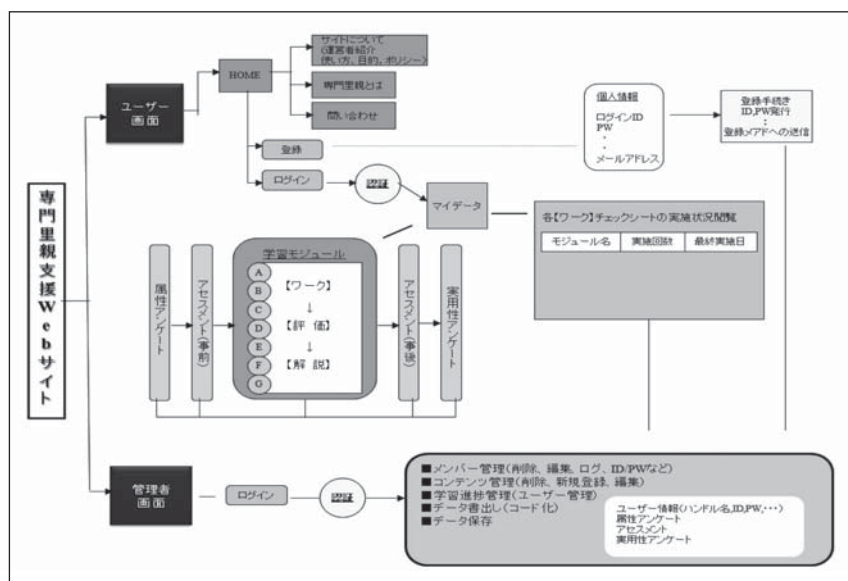
開発的研究において実践モデルを提供する側にも、ウェブサイト型のツールによるメリットが数多くある。それは、ウェブが見られる環境であればどこでも同じようにアクセスできるので、ユーザーの学習環境によって作り分ける必要がない、コンテンツをサーバーの中で変更・修正等更新を容易にすることができる、学習者の進捗情報を提供者側が得られるので、それに応じた指導ができることや、電子メールやチャット等インターネットで標準的に使われているツールが学習を補うといったことである（森田、2002）。

近年、EBP (Evidence-Based Practice) の重要性とともに、芝野 (2004a ; 2004b) は、実践からのフィードバックにもとづく継続的な実践評価と改善のために、実践家であるソーシャルワーカー自身が実践から得られるデータ（情報）を効率よく収集し、データベースとして蓄積する必要性を主張している。インターネットを通じたウェブサイトにデータベースを組み込むことで、データはリアルタイムで収集、保存でき蓄積される。その蓄積されたデータは、必要な時いつでも利用することができるので、日々ユーザーから得られた大量の

データを評価することを可能にする。

2. 学習ツールの構成

開発された叩き台学習ツールは、「専門里親支援 Web サイト」との名称で、下図のような仕組みとなっている（図表 3）。



図表 3 専門里親支援 Web サイト

この学習ツールは、フェーズⅡで実施した調査により明らかとなった養育支援ニーズを参考とし（木村・芝野、2006）、専門里親が習得すべきテーマごとにモジュール化した⁹⁾。このようにすることで、学習ツールのユーザーは、自分にとって必要なモジュールを選択して学習することができる。モジュールは7つである（図表 4）。

A 専門里親になるための姿勢・態度

専門里親として里子を養育する自身の動機・気持ち・考え方を点検しながら、専門里親の意義や役割について学び、その理解に役立てる。

B 里子にみられる徴候の理解と対応

専門里親に委託される子どもがどのような子どもなのかについて、虐待や非行による影響について知り、子どもの理解や対応に役立てる。

C 里子の適応プロセス

里子の年齢層や里親家庭での様子から、里子が里親家庭になじむプロセス、「心の傷」の癒しのプロセスや、受託時の子どもの年齢層別の傾向について知り、理解を深める。

D 里子を迎えて起こる家族内外のものと

里子を里親家庭に迎えることで、里親が直面するであろう家族の内外で起こりうるものごとについて知り、どのように対応、かかわっていけばよいのかを考える。

E 子どもへのかかわり方

里親自身の里子への態度や行動を点検し、その背景にある里子に対する思いや考え、自身の養育観などをみつめる機会とする。

F ストレスとの付き合い方

里子の養育上生じるさまざまなストレスにどのように対処しているかを点検し、ストレスにうまく対処する、ストレスと上手につき合っていく方法を考える機会とする。

G 里親 - 里子 - 実親のかかわり

里子・実親の親子関係にまつわるものごとについて理解を深め、専門里親として、どのようにかかわるのかについて学ぶ。

図表 4 学習ツールのモジュール

各モジュールは、【ワーク】→【評価】→【解説】とすすむ。【ワーク】では、各モジュールのテーマに関するチェックシートにより、里親自身や里子、家族の状況等を自己チェックする。【評価】では、ワークで行った自己チェックの結果を点数表や分類表と照らし合わせながら、自身の関心事や現状、課題等が示される。そして、【解説】において、評価で整理した自身の関心事や現状、課題に合わせリンクさせた必要箇所を重点的、効率的に学ぶのである。解説のなかには、「実践上のアドバイス」「里親体験談」「里子・養子からのメッセージ」「実子の声」などが含まれており、実際がよりわかりやすいようにしている¹⁰⁾。

使い方としては、会員制をとり、ウェブサイトには会員登録機能をつけ、IDとパスワードを発行し、このウェブサイトを使用する際にそのIDとパスワードを使ってログインするという方法をとった。最初に、「属性アンケート」「アセスメント・シート（事前）」に回答してもらい、ユーザーの基本情報が得られるようにしておく。最後あるいは管理者の求めに応じて、「アセスメント・シート（事後）」と「実用性アンケート」に回答してもらう。また、このサイトや学習内容に関する質問等は、トップページの「問い合わせ」により、メール機能を使ってやり取りができるようにした。

このツールで保存、蓄積されるデータとは、上述したIDやパスワードとアンケート類のデータのほか、各モジュールの【ワーク】にあるチェックシートのデータである。

Ⅳ. 学習ツールの試行と評価

1. 試行方法

試行にあたっては、里親関係機関・団体の集会や広報紙等を通じ、試行に協力してくれる里親、里親支援の専門職者（児童相談所や里親関係機関のケースワーカー、児童福祉施設職員など）やM-D&Dの研究者と、一般の人々を想定した大学生を募り¹¹⁾、2007年7月から10月末までにインターネットを介しウェブサイト上で個別に試行してもらった。

学習ツール試行者（「アセスメント・シート（事前）」回答者）は92人、そのうち、里親は18人、専門職者11人、研究者8人、大学生55人であった（図表5）。7つの各モジュールの利用状況は、モジュールAが87人、モジュールBが43人、モジュールCが43人、モジュールDが45人、モジュールEが50人、モジュールFが51人、モジュールGが44人である¹²⁾。実用性アンケート回答者は72人であった。

○里親 18人（男性－6人、女性12人）

里親の種類：専門里親－7人、里親登録者－10人、未申請－1人

子どもの受託経験：乳児－7人、幼児－12人、小学低学年－10人、

小学高学年－6人、中学生－7人、高校生－3人

被虐待児－11人

○専門職者 10人（男性－4人、女性－7人）

職種：児童福祉司－3人、里親関連団体ケースワーカー－4人、

児童福祉施設児童指導員－4人

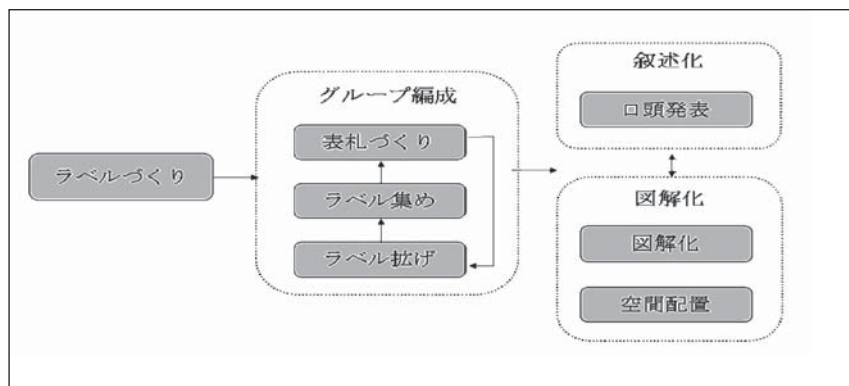
○研究者 8人（男性1人、女性7人）

○大学生 55人；2回生女子

図表5 学習ツール試行者92人の内訳

2. 評価方法

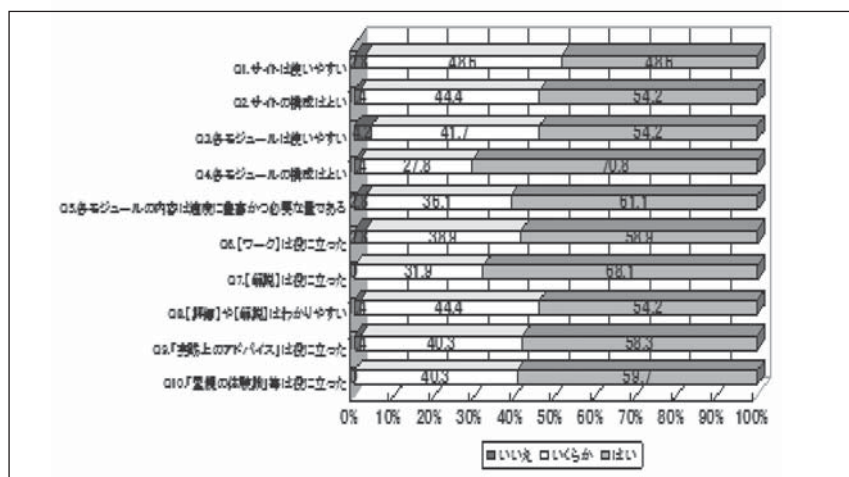
対象者が学習ツール使用後回答する「実用性アンケート」の量的評価と質的評価を行う。「実用性アンケート」はユーザーによるサイトやモジュールの実用性に関する主観的評価である。Q1からQ10までは3件尺度（「はい」「いくらか」「いいえ」）で回答される。各質問項目の評価を量的に分析し、総体的評価を得る。Q11からQ13までのウェブサイトあるいは各モジュールの良い点、改善点と他知りたい事についての自由記述項目では、自由記述の内容を分析するために、KJ法（川喜田、1986）を用いた（図表6）。分析は、社会福祉を専攻する大学院の研究員5人、博士課程の院生1人と筆者の7人のグループで行った。このうち児童福祉を専門とする者は5人、内容分析の手法を用いた研究経験のある者は6人である。



図表6 KJ法の手順

3. 実用性アンケートの量的評価

「実用性アンケート」のうち3件法で回答するQ1からQ10までの結果が、図表7である。Q1からQ10まで全質問項目で、良いとする「はい」は50%程から70%程となっている。「はい」「いづらか」を含めると全項目で95%から100%を占め、「いいえ」は最も多い項目で4.2%ときわめて低かった。



図表7 実用性アンケートの結果

サイト全体に関する質問では、Q1の使いやすさ、Q2の構成の良さ双方ともに「はい」が半数前後であった。各モジュールに関する質問（Q3・Q4・Q5）では、使いやすさで「はい」が54.2%であるが、構成については70.8%とかなり高く、内容の豊富さと量についても61.1%と比較的良好な評価を得た。各モジュールを構成するコンテンツについての5つの項目（Q6～Q10）では、評価の高かったものから順に、Q7「（ワークの）【解説】は役に立った」、Q10「『里親の体験談』等は役に立った」、Q6「【ワーク】は役に立った」、Q9「『実践上のアドバイス』は役に立った」と、Q8「【評価】や【解説】はわかりやすい」であった。

4. 実用性アンケートの質的評価

(1) ウェブサイト・各モジュールの良い点

Q11「このWebサイトあるいは各モジュールの良い点は何ですか」についての自由記述からつくられたラベル数は、里親11枚、専門職者12枚、研究者8枚、大学生57枚の計88枚であった。ここからグループ編成を行い、図解化され作成された図（図表8）を下方からみていく。

まず、コンテンツについて、2つのグループ（以下、「島」と呼ぶ）が見いだされた。1つは、『とくに、里親制度を知らない人や、これからなろうとする人にとって、制度・役割や適性、これから起こるであろう事を知ることができる』という、一般の人々やおおむね里親初心者であろう人々にとってのコンテンツの良さである。もう1つは、『対処法、相談しにくい事や他の手段では、わからなかった事が具体的にわかる』というコンテンツの具体性における良さである。これらコンテンツの良さにより、解説がユーザーに伝わりやすいのではないだろうか。よって、この2つの島は、『各モジュールに、丁寧かつわかりやすい豊富な解説がある』島の下位カテゴリーと考える。

そして、この解説の良さに関する島と、これに並んで『チェックシートやアンケートがわかりやすく、答えやすい』という【ワーク】やその他のチェックシートに関する島が、ともに構成における『順序立って分類されていて、見やすい、

わかりやすい』という良さに影響を及ぼしていると考えられる。また、サイトのデザインからの見やすさ・わかりやすさについての島『デザインからの雰囲気がよく、簡潔にまとまっていて、見やすく、わかりやすい』が相まって、『客観的に自己をふり返り、見つめ直しながら、それに応じて学習ができる』という学習ツールの効用を引き出しているといえるであろう。『自分の都合・目的に合わせて使うことができる』という本ツールの形態上の強みとともに、『このような専門里親について、体系的に構成された学習ツールは重要である』という学習ツールの存在意義が認められる。

(2) ウェブサイト・各モジュールの改善点

Q12「この Web サイトあるいは各モジュールの改善点はどのようなところですか」では、里親 8 枚、専門職者 15 枚、研究者 6 枚、大学生 28 枚の計 57 枚のラベルを得た。ここでは、『物理的・精神的な負担に配慮し、サイトへのアクセスのしやすさを工夫する』『【ワーク】→【評価】→【解説】の動作を使いやすくする』『理解を助けるための工夫を要する』と『答えにくいチェックシートがある』の 4 つの島が認められた（図表 9）。

まず、サイトへのアクセスという入口段階に関し、『物理的・精神的な負担に配慮し、サイトへのアクセスのしやすさを工夫する』必要がある。物理的な負担としては、「携帯電話では見れない」という意見がある。精神的な負担としては、利用するためのユーザー登録あるいは「属性アンケート」等における個人情報の入力に関する抵抗感や、仲間やおしえてくれる人のない、一人でこのサイトを利用する上での負担感があるようである。

学習を展開していくモジュールの構成に関する『【ワーク】→【評価】→【解説】の動作を使いやすくする』島には、ウィンドウが複数画面出たり、それらウィンドウ間であちらこちに飛んでしまったりすることにより、「どこにいるのかわからなくなる」ことが起こってしまう。また、チェックシートの回答とその評価を見やすくするような「チェックシートの動作を使いやすくする」点があげられている。

『理解を助けるための工夫を要する』という島では、主に文字情報の「量あ

るいは数が多く、読みづらい」ということと、これに対する解決策ともいえる、必要な文字情報をよりしほり込む、あるいは画像や図表等による「視覚的な工夫をして見やすくする」という改良案があがっている。また、大学生の回答に多いのが、「文章・用語にわかりにくいところがある」ことである。これは、「量あるいは数が多く、読みづらい」や「視覚的な工夫をして見やすくする」が影響している面があるであろう。そのほか、「里親の体験談」や「実践上のアドバイス」など「より具体例・策を入れる」ことがあがっている。

ワークのチェックシートの中には、『答えにくいチェックシートがある』ことが指摘されている。それには、「里親以外の人には答えにくい」という意見と、複数の里子の養育経験がある場合、どの里子・どの実親についてチェックを行うか迷うという意見、また、チェックシートの結果により里親が気落ちしないような配慮と工夫を必要とするという意見があった。

(3) 他知りたいこと

Q13「この Web サイトあるいは各モジュールの内容等に関し、他に知りたいこと、取り上げるとよいと思われることがあればお書きください」では、里親 6 枚、専門職者 6 枚、研究者 1 枚、大学生 26 枚の計 39 枚のラベルが得られた。そこから、『里親・里子の全体像』『プラスすべき知識要素』『プラスすべき技術要素』『質問・意見交換』という 4 つの島と、どの島にも属さない 1 枚のラベルが見いだされた（図表 10）。

『里親・里子の全体像』の島は、すべて大学生が記述したラベルからなっている。「里親について知りたい」では、里子を受け入れる上での、あるいは直面する困難（「ぶつかる壁」）でのアドバイスや、里親の気持ちを含めた実体験を求める内容である。また、里子側の気持ちやその生活など、「里子について知りたい」とするものがある。このサイトには、サイトのトップページにログインせずとも閲覧できる「専門里親について」という専門里親制度上の説明を掲載しているページや、各モジュールの解説内に「里親の体験談」や「里子・養子からのメッセージ」というコンテンツを含めている。しかしながら、ここでの要望というのは、制度の内容でもなく、また、ある特定のテーマやトピック

クにおける里親の実体験や里子の声というよりは、里親制度を知らない人たちが、里親や里子についてのイメージを全体的にとらえたいとする声なのではないかととらえられる。

『プラスすべき知識要素』の島では、大別すると「制度や現状について説明がよりほしい」という、前述した「専門里親について」のページや学習ツールのモジュール内でふれてはいるが、専門里親がどのようなものか伝えきれていないと考えられるものと、「里親をするにあたって活用・連携できる社会資源を知りたい」という社会資源に関する具体的情報提供を求めるものと、啓発的な「里子の権利についても理解の促進を図れるような項目」の3つがある。

『プラスすべき技術要素』の島には、「具体的な里子の対応方法をおしえてほしい」と「里親となる者自身が自己覚知する内容を設ける」がある。「具体的な里子の対応方法をおしえてほしい」は里親からの声でなるが、発達障害や愛着障害にまつわる対応に困る事がらや、里子の実親に対する気持ちの受けとめ方などに関する対応方法を教示するような具体例を求めるものである。また、「里親となる者自身が自己覚知する内容を設ける」は、里親関係機関・団体の専門職者と大学生からの意見であるが、里親自身の育成歴や親子関係をふり返るようなもの、また、専門里親としての適性をはかるものがあがっている。

そのほか、Q&Aや質問欄、里親のブログを設け、『質問・意見交換』ができるようにする求めがある。

V. 考察

1. 学習ツールの有用性

学習ツールの試行評価において、実用性アンケートでは、内容の豊富さ・量やモジュールの構成など、概して良い評価が得られた。専門里親について体系的に構成された学習ツールの重要性を認識する評価、自分の（時間的）都合や目的に合わせて使うことができるという本ツールの形態上の評価や、客観的に自己をふり返り見つめ直ししながら、それに応じて学習ができるという評価は、

本学習ツールの意図した学習方法の工夫や効用に合致するものである。

サイトデザインの良さもあるが、実用性アンケートで最も高い評価を得たのはモジュールの構成であった。自分自身や自分の里子にあてはめて【ワーク】を行い、【評価】を受けて自分の関心事やニーズを明らかにし、それらに該当する【解説】箇所へすすむ仕組み等が、「順序立って分類されていて、見やすい、わかりやすい」評価となっているのであろう。また、この一連の流れにある【ワーク】の評価が高く、ユーザーの関心やニーズをしまり込むというツール上意図した効用だけでなく、ユーザーにとってはチェックシートに答える方式がわかりやすく答えやすく、そのモジュールの学習に入るところでの取りつきやすさという効用もあった。【解説】における評価も高かったのであるが、解説の豊富さ、丁寧さ、わかりやすさだけでなく、「実践上のアドバイス」「里親の体験談」「里子・養子からのメッセージ」等で、具体的な事例や対処法を提示している点が評価されていた。

本来、この学習ツールは里子の養育過程を通じ長期にわたって活用することを想定している。本試行においては、期間が短く、ユーザーの行動上の変化等は評価していないが、今後の試行と改良のイテレーションにおいては、より客観性をもった科学的評価方法を用い、実証的に有用性を示していくことが必要である。

2. 学習ツールの改良点

(1) 物理的・精神的な負担の軽減

まず、改善点であった「物理的・精神的な負担に配慮し、サイトへのアクセスのしやすさを工夫する」であがっていた登録制による個人情報の入力等に関する精神的な抵抗感については、敬遠する人も少なくないと想像する。このことと関連し、実用性アンケートの自由記述で物理的・精神的な負担としてあがっていた「一人で行うにはかなりのエネルギーを要する」との意見に対し、学習者の学習支援を行うチュータリング¹³⁾やメンタリング¹⁴⁾を導入することが考えられる。このようなサービスは、ユーザーにとってメリットとなり、登録制

とユーザー情報の提供に納得が得られるかもしれない。この「一人で行うにはかなりのエネルギーを要する」のコメントには、里親の勉強会などで集団で行うことも提案されている。このような学習ツールの利用法はもともと想定しており、今後の試行において集団学習による試行評価も行う必要がある。

(2) 【ワーク】→【評価】→【解説】の動作

チェックシートの自動採点化については、実は叩き台開発の段階で思考したことであった。しかしながら、自動採点化の機能をつけると、さらにコストがかかるということでサイト制作の予算上断念した事情がある。それゆえ、学習を展開する【ワーク】→【評価】→【解説】の動作を改善し、チェックシート画面に印刷ボタンをつけ、使いやすくすることで対応をはかりたい。【ワーク】・【評価】・【解説】と同時に最大で3つ画面が出てしまう仕組みを、1画面上で【ワーク】のチェックシートから【評価】へ、【評価】から【解説】のリンク箇所へと移動するようにする。こうすることで、自分がどのページのどこにいるのかわからなくなってしまうという問題はかなり軽減されるはずである。

(3) 理解を助けるための工夫

学習ツールのモジュール化とその構成について評価は良いものの、見やすさや読みやすさの点でより工夫を要する。情報の豊富さは落としてはいけないが、文字量を減らし読む負担を軽減するために、画像や動画等を取り入れることが望ましい。言葉（ナレーション）と画像によるコンテンツ提示は、学習および記憶の再生において高い効果がある（Mayer、2001；清水、1993）。

画像や動画の活用に関しては、学習ツールの叩き台開発の段階でも検討されていた。しかしながら、この学習ツールの叩き台を開発していた2005年頃は、インターネットの接続に電話回線やISDN回線を用いた低速で小容量の情報を送受信させるナローバンド回線の利用が、インターネット利用者の半数を占めていた（総務省、2008）。インターネットの接続料もかなり高く、データを受信するのに時間がかかる上に、利用時間が長くなればなるほどコストがかさむ。また、PC端末の性能不足もあった。このようなICT環境の状況により、文字情報主体の学習ツールとしたわけである。現在では、ブロードバンド回線の利

用率、とくに光回線がかなり普及しだしており（総務省、2008）、利用料も比べものにならないくらい安価になった。PCの性能も上がり、一般家庭向けのPCでも動画や音声コンテンツを再生するソフトウェアがプレ・インストールされているものも多い。このことから考えると、現在では、ナレーションや図・アニメ等を用いた画像や動画によるコンテンツを用いても、一般家庭でのインターネット利用に性能上もコスト上も耐えうると判断してもよさそうである。これらを使ったコンテンツを制作していく方向を考えたい。

（4）学習目的・方法の案内

実用性アンケートにおける改善点では、【ワーク】のチェックシートについて、里親以外の人には答えにくいという意見や、複数の里子の養育経験がある場合、どの里子・どの実親についてチェックを行うか迷うという意見、チェックシートの結果により里親が気落ちしないような配慮と工夫を必要とするというような意見があった。これについて、この学習ツールの目的や学習方法をユーザーにうまく伝えられていないところがあるように感じる。

この学習ツールは主として専門里親に対するものであり、養育過程で困ったことに出くわした時にも活用するものである。実際、モジュールによっては里親でない人や里子の養育経験がないユーザーには回答できないチェックシートがある。そのようなチェックシートでは、チェックシートの説明箇所に、「これまで子どもを受託したことのない方は、このワークの【評価】へ」の案内をしている。ワークの内容からの評価により、里親でない人や里子の養育経験がないユーザーは、評価や解説にあるすべてのコンテンツを学習してもよいし、関心のある項目をピックアップして学習することになる。ワークを実施したユーザー同様、ワークの評価は自身が学ぶ必要のある項目をしぼり込むことに利用してもらえるのだが、それを伝えきれていない。もう一つは、複数の里子の養育経験がある場合には、養育上の問題や困難があるなどの里子にあてはめモジュールを活用することになるが、それについても案内不足かもしれない。また、チェックシートの結果により里親が気落ちしないような配慮と工夫という点では、ワークで自己をふり返り、評価により気づきを得て、解説での学習

から新たな発見を得るという学習アプローチの意図をよりうまく伝えていく必要があると感じる。

(5) 付加すべきコンテンツ

「実用性アンケート」の自由記述項目の KJ 法による分析から、今後学習ツールに付加すべきコンテンツについていくつかあげておく。

付加すべきコンテンツにおいて、自由記述項目 Q13「他にしりたいこと、取り上げるとよいと思われること」であがった「里親・里子の全体像」を伝えるコンテンツや「プラスすべき知識要素」の制度や現状についての説明は、トップページの「専門里親について」に加えていくことが望ましいであろう。専門里親を知らない一般の人びとにも、どのような人たちが専門里親となり、どのように里子と出会い、里親家庭で一緒に暮らしているのかについてイメージが得られるようにしたい。これには、短編的なアニメやドラマ仕立てのものが有効であろう。新聞のコラムで里親をとりあげた記事や里親のエッセイ、里親の体験にもとづく書籍などがあるが、そういったものを題材として制作することができそうである。

具体例を増やすということや具体的な対応方法を入れることについては、事例検討を行うなどのパートを導入することも考えていきたい。叩き台学習ツールでは、ワークのチェックシートにより気づきを得るアプローチをとった。事例検討の手法は、ユーザーが自身や養育過程をふり返り得た気づきから解決策を考え、実際の行動にうつすために有効であると考え。しかしながら、事例検討では、まず各モジュールのテーマに沿った、専門里親が出くわすであろう事例の収集が必要となる。どのような事例を取り上げるべきか、また事例検討では正答が一つあるわけでもなく、事例をどのように提示し、自身にあった解決策をどのように見出す仕組みをつくるのが問われる。この事例検討のパートの開発が、一教材開発といったものとなろう。

おわりに

この専門里親支援モデルの目的は、専門里親が里子の養育過程に必要な知識や技術を習得し、あるいは社会資源を活用することで、困難な状況や悩みに直面したとしてもそれに対応していくコンピテンスを高めることにある。本稿では、叩き台学習ツールの試行において、ある一定の学習効果を得ることができた。また、学習ツールに関する評価だけでなく、専門里親支援モデル全体に関するヒントも得ることができた。社会資源の活用については、叩き台専門里親支援モデルの社会資源モジュールの開発が核となる。また、コミュニティサイト・モジュールはユーザーが自ら参加して意見交換をはかって情報提供あるいは収集を行ったり、情緒的なサポートを得たりすることに役立つであろう。

M-D&D は、社会にある問題を分析し、ある特定領域や問題のための実践モデルを開発し普及させる手続きを提供してくれる。専門里親支援モデルの叩き台の開発からそれをどのように具現化し、現場で活用できるものとしていくか。理論と実践をつなげるための研究の重要性を M-D&D はおしえてくれる。

注

- 1) 専門里親対象者は、①養育里親名簿に登録されている者であって、養育里親として3年以上の委託児童の養育の経験を有する者、②3年以上児童福祉事業に従事した者であって、都道府県知事が適当と認めた者、③都道府県知事が①及び②に該当する者と同等以上の能力を有すると認定した者である。
- 2) 専門里親研修は、通信教育とスクーリングにより3ヶ月以上かけて受講する。その内容は、養育の本質・目的及び対象の理解に関する科目（8科目）、科目の内容及び方法の理解に関する科目（4科目）と、養育実習（児童福祉施設において7日間）となっている。
- 3) 庄司（2003：18-19）は、社会が用意した、生来の家庭に代わる養育として制度化された仕組みを「社会的養護」とし、その体系を家庭的養護（里親、養子縁組）と施設養護（乳児院、児童養護施設などの養育系の入所施設）に

大別している。

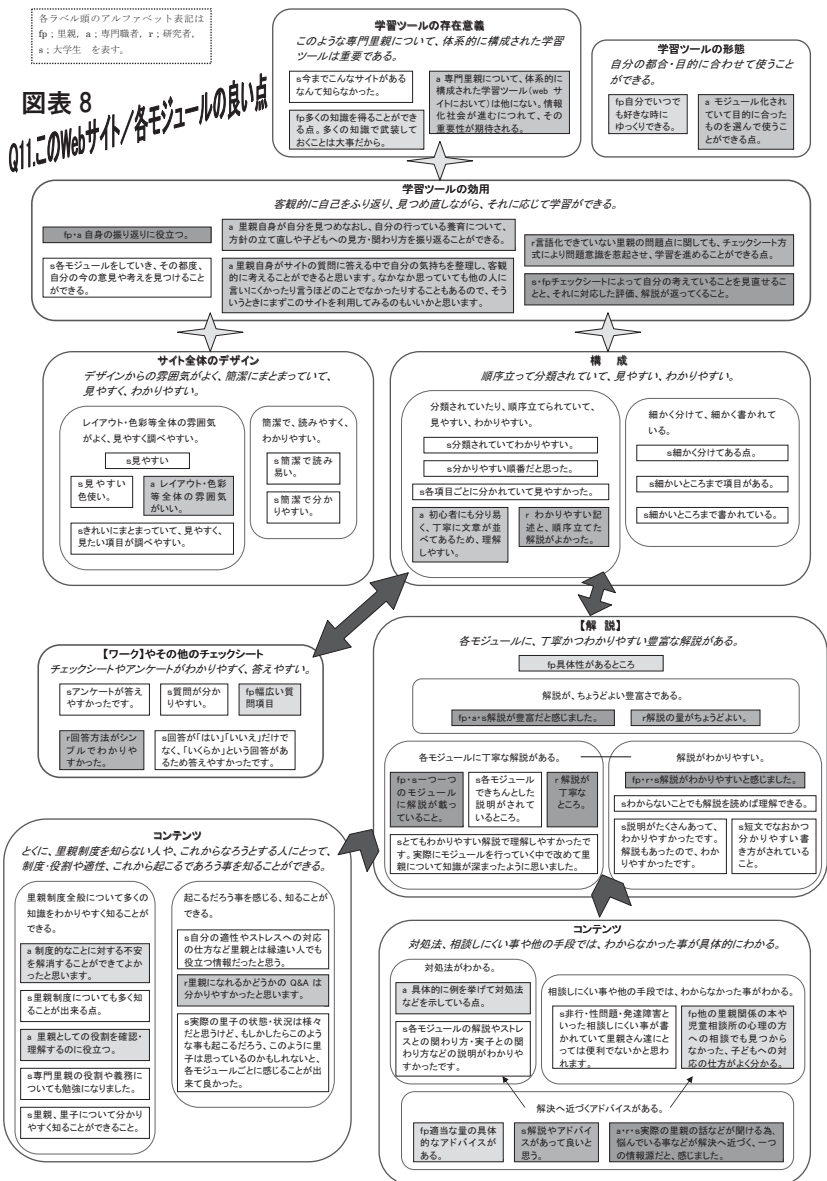
- 4) 木村・芝野(2006)は、専門里親支援の内容や方法を追究する背景を、①里親支援における実績の乏しさ、②里親制度と養子縁組制度の混用による影響、③実証的研究の不足の、3つの要点に整理している。
- 5) 芝野(2002)のいう実践モデルとは、「絞り込んだ対象者や対象問題に対する社会福祉実践の理論的背景と意義を説明し、ある程度具体的な実践方法を解説したもの」(p.41)を指す。
- 6) プロセティックとは、「補綴的」という意味で、「損なわれた身体の一部を補うことによって失われた機能(あるいは本来あるべき機能)を取り戻すために義足や義手、義歯といった器具を用いて行う治療法や治療学を示す」(芝野、2002: vi)。
- 7) eラーニングとは、情報技術によるコミュニケーション・ネットワーク等を活用した主体的な学習方法のことである(先進学習基盤協議会(ALIC)、2002)。
- 8) WBT(Web Based Training)とは、各端末のコンピューターシステム全体を管理するOSの違いを超えてインターネット上にデータを掲示することのできるドキュメント・システムであるwww(World Wide Web)を経由し、マルチメディア教材を用いて自分のペースで学ぶことができる自己学習システムのことである(玉木、2003)。
- 9) M-D&Dでは、実践モデルをモジュール化することを前提としている(芝野、2002)。それは、現場で実践モデルを導入する際に、人材や設備等の制約によりモデルをフルスケールで採用できない場合もあり、モジュール化しておくことで、あるモジュールを単独で使用したりいくつかを組み合わせで使用したりと、実践現場でのテイラー・メイド化を容易にするためである。
- 10) 引用・参考資料として、里親養育マニュアル作成検討委員会(2004)『里親が知っておきたい36の知識 法律から子育ての悩みまで』、厚生労働省雇用均等・児童家庭局家庭福祉課(2003)『子どもを健やかに養育するためにー里親として子どもと生活をするあなたへ』、児童虐待防止対策支援・

治療研究会（2004）『子ども・家族への支援・治療をするために ―虐待を受けた子どもとその家族と向き合うあなたへ―』、津崎哲郎（1992）『子どもの虐待』、庄司順一（編著）（2005）『Q & A 里親養育を知るための基礎知識』、湯沢雍彦（編著）（2005）『里親入門 ―制度・支援の正しい理解と発展のために―』を使ったほか、「里親体験談」では筆者が独自に里親に対し行ったインタビューを抜粋して掲載している。

- 11) 専門職者や研究者に関しては、筆者がこれまでの研究あるいは現場での活動において関わりのあった児童相談所2か所と里親関連団体1か所、児童福祉施設1か所と、M-D&Dの提唱者である芝野の大学院ゼミナール所属の院生・研究員に協力依頼した。大学生については、筆者の所属する女子大学の社会福祉学科「児童福祉論」の履修生を対象とした。
- 12) しかしながら、モジュールAとモジュールF以外の5つのモジュールは、基本的に里子の養育経験にもとづき使用するものであり、養育経験のない者は【ワーク】をスキップして【評価】や【解説】を利用している場合がある。これらはチェックシートを実施していないためにデータベースには反映されないため、ここでの数はモジュールの試行者数を正確に表しているものではない。実際にはこれより多いことが推測される。
- 13) チューターは家庭教師、個人教師の意味で、チュータリングは家庭教師のように、学習に関する指導やサービスを行うことをいう。通常は、担当講師が行う採点や解説、質問への回答などの学習支援を指す（日本イーランニングコンソシアム、2009）。
- 14) メンタリングとは、学習内容やeラーニングコースにおける受講方法に関する知識および経験の豊かなeメンタが、学習者と継続的に双方向性コミュニケーションを行い、学習者を支援することである（松田・原田、2007）。eメンタの活動は、学習者を激励したり、進捗管理を支援したり、効果的な学習方法を提案したりといった、学習者の学習意欲などの情緒面の支援を中心としたものである。

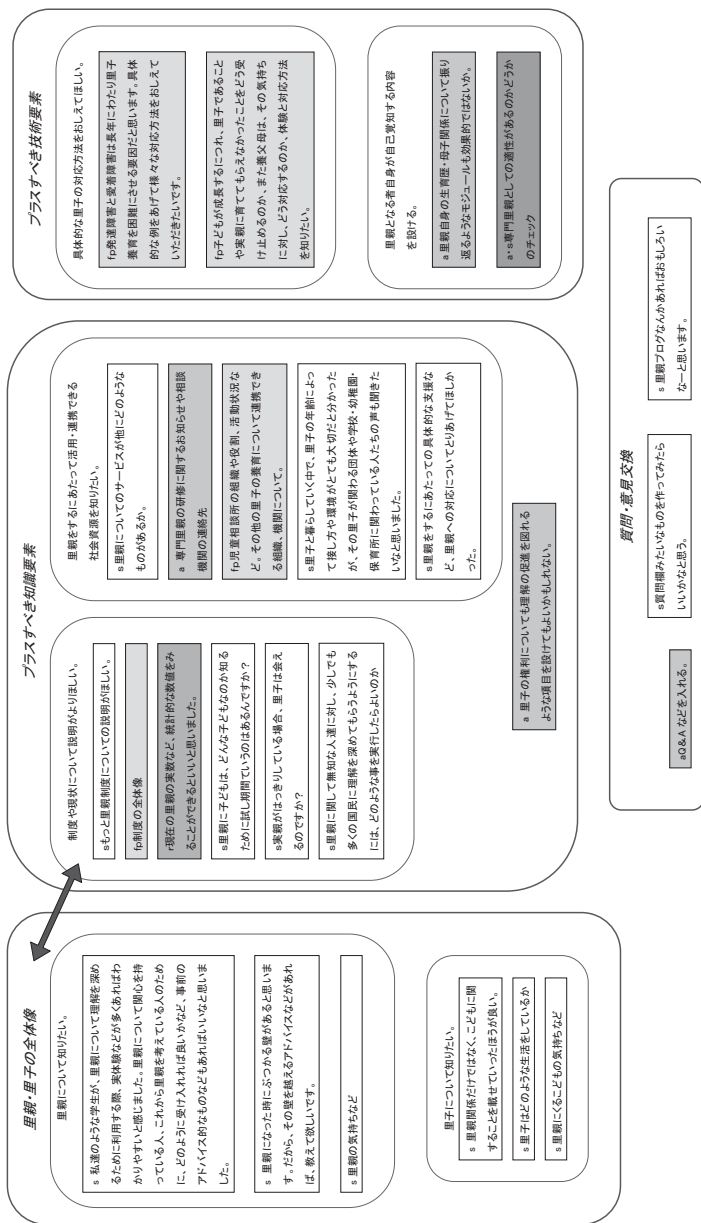
各サブページのアルファベット表記は
p: 里親, a: 専門職者, r: 研究者,
s: 大學生 を表す。

図表 8
Q11.このWebサイト/各モジュールの良い点



図表 10 Q13. 他に知りたいこと、取り上げるとよいと思われること

各グループのアルファベット表記は、
中：里親、a：専門職員、r：研究者、
s：大生、を表す。



引用文献

- 荒木浩二 (2002) 『実践 e ラーニング 競争優位に立つ最新手法と成功のモデル』
毎日新聞社
- Germain, C. B. & Gitterman, A. (1996) *The Life Model of Social Practice: Advances in Theory and Practice (2nd ed.)*, New York: Columbia University Press
- 飯田幹雄 (1998) 「里親制度の現状と課題」日本の児童福祉 13, 146-161
- 児童虐待防止対策支援・治療研究会 (編) (2004) 『子ども・家族への支援・治療をするために ―虐待を受けた子どもとその家族と向き合うあなたへ―』
財団法人 日本児童福祉協会
- 川喜田二郎 (1986) 『KJ 法―混沌をして語らしめる』中央公論社
- 菊池緑 (2007) 「日本で里親制度が利用されない理由とは? ―国際比較研究を通して言えること―」子どもの虐待とネグレクト 9 (2), 147-155
- 木村容子 (2005) 「被虐待児の養育を担う専門里親の潜在的ニーズ ―里親のニーズに関するアンケート調査から―」関西学院大学社会学部紀要 98, 93-105
- 木村容子・芝野松次郎 (2006) 「里親の里子養育に対する支援ニーズと「専門里親潜在性」の分析に基づく専門里親の研修と支援のあり方についての検討」社会福祉学 47 (2), 16-29
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局家庭福祉課 (監修) (2003) 『子どもを健やかに養育するために ―里親として子どもと生活をするあなたへ―』財団法人 日本児童福祉協会
- 松田岳士・原田満里子 (2007) 『e ラーニングのためのメンタリング』東京電機大学出版局
- Mayer, R. E. (2001) *Multi-media Learning*, Cambridge : Cambridge University Press
- 森田正康 (2002) 『e ラーニングの〈常識〉 誰でもどこでもチャンスをつかめる新しい教育のかたち』朝日新聞社

日本イーランニングコンソシアム (2007) 「e ラーニング用語集」

<http://www.elc.or.jp/kyoutsu/yougo.html>, 2009/03/14

岡村重夫 (1957) 『社会福祉学総論』 柴田書店

岡村重夫 (1963) 『社会福祉学各論』 柴田書店

岡村重夫 (1983) 『社会福祉原論』 全国社会福祉協議会

坂手康志 (2000) 『E ラーニング』 東洋新報社

里親養育マニュアル作成検討委員会 (編) (2004) 『里親が知っておきたい 36
の知識 法律から子育ての悩みまで』 社団法人 家庭養護促進協会 神戸事務
所

先進学習基盤協議会 (ALIC) (編) 2002 『e ラーニング白書 2002/2003 年版』 オー
ム社

芝野松次郎 (2002) 『社会福祉実践モデル開発の理論と実際』 有斐閣

芝野松次郎 (2004a) 「福祉」 『エビデンス・ベースト・カウンセリング』 至文堂,
89-102

芝野松次郎 (2004b) 「ソーシャルワーク研究における評価研究法」 ソーシャル
ワーク研究 29 (4), 42-51

清水康敬 (1993) 『教育情報メディアの活用』 第一法規出版

篠島里佳 (1998) 「里親の相談ニーズに関する調査報告書」

[http://www.foster-family.jp/data-room/data/satooya_needs/satooya_nees.
html](http://www.foster-family.jp/data-room/data/satooya_needs/satooya_nees.html), 2004/05/30

庄司順一 (2003) 『フォスターケア ―里親制度と里親養育』 明石書店

庄司順一 (編著) (2005) 『Q & A 里親養育を知るための基礎知識』 明石書店

庄司順一・谷口和加子・安藤朗子・ほか (1999) 「里親への支援のあり方に関
する研究」 日本子ども家庭総合研究所紀要 35, 35-39

庄司順一・谷口和加子・高橋重宏・ほか (2000) 「里親への支援のあり方に関
する研究 (2)」 日本子ども家庭総合研究所紀要 36, 59-71

総務省 (2008) 「平成 19 年「通信利用動向調査」の結果」

玉木鉄也 (2003) 「e ラーニングと人材育成」, 玉木鉄也・小酒井正和・松田岳

- 士（編）『e ラーニング実践法 ―サイバーアライアンスの世界―』 オーム社
- Thomas, E. J. (1978) "Mousetraps, Developmental Research, and Social Work Education," *Social Service Review* 52, 468-483
- Thomas, E. J. (1984) *Designing Interventions for the Helping Professions*, Beverly Hills: Sage Publications
- 津崎哲郎（1992）『子どもの虐待』 朱鷺書房
- 湯沢雍彦（編）（2004）『里親制度の国際比較』 ミネルヴァ書房
- 湯沢雍彦（編著）（2005）『里親入門 ―制度・支援の正しい理解と発展のために―』 ミネルヴァ書房